

長岡京市文化財調査報告書

第51冊

2008

長岡京市教育委員会

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第51冊

2008

長岡京市教育委員会

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 調査地全景 (北から)



(2) 調査地全景 (南から)

序 文

本書は、長岡京市域の中央部にあたる開田地区と天神地区において、平成19年度の国庫補助事業として行った2件の発掘調査の成果をまとめたものです。前者の開田地区は長岡京跡の西市が推定されている場所で、調査では西市に関連する遺構、遺物の確認が期待されていました。一方、天神地区の調査は周辺で長岡京期の鑄造遺構が確認されており、施設の性格や広がりなどを検討するために行いました。このように両地区における発掘調査の目的は約1200年前の都である長岡京の経済、流通に係わるもので、当時の経済や流通を明らかにすることは長岡京の実像に迫るうえで欠かせない要素といえます。

長岡京跡東西市の「にぎわい」や生産施設の「活力」の背景には、本地域の豊かな水と緑、そして交通の便という恵まれた特性があったものと想像できます。さらには、こうした良好な環境が、太古の時代から営々と人々の生活を支え、そして現代まで豊かな歴史と文化として守り育んできたことを、市内各所に残された埋蔵文化財をはじめとする歴史資料から窺い知ることができるのです。

市内各所に残されている様々な歴史資料は、長岡京市民の共有財産であり、郷土の成長が刻まれた大切な記憶の断片といえます。私達は、こうした歴史資料の収集と保存、そして調査研究を今後とも進め、過去の様々な断片を系統立てて整理していきたいと考えています。また、その成果を有効に活用するためには、市民の皆様に広く公開し、さらには市民の皆様と共に考え、郷土の歴史の実像に迫っていくことが最も重要です。そして、こうした取り組みが、本市の目指す「緑」と「にぎわい」が調和した「ゆたかな」街づくりへの一助となるものと考えています。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご協力をいただきました土地所有者の方や近隣の皆様方、ご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

平成20年3月

長岡京市教育委員会

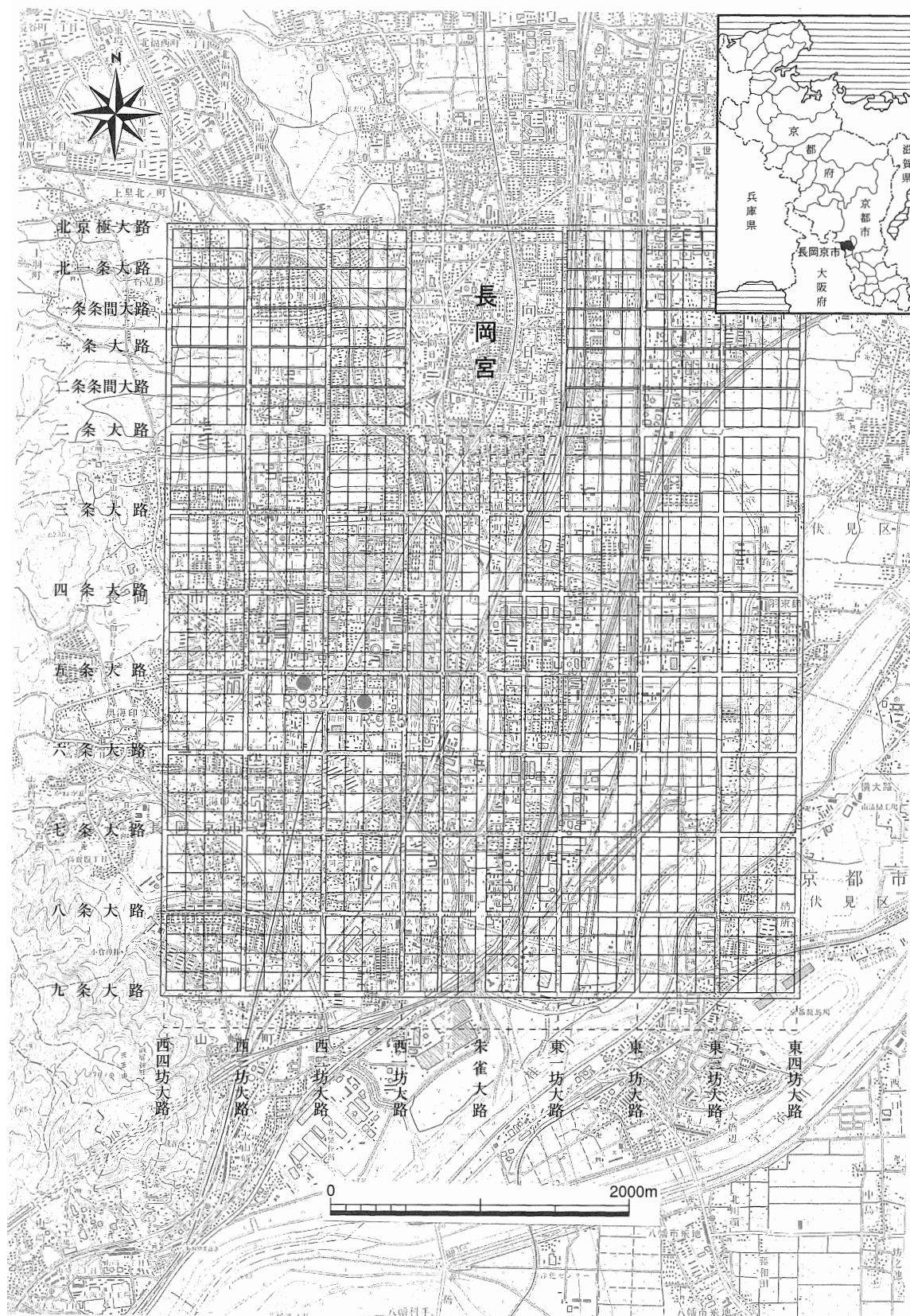
教育長 芦田 富 男

凡 例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成19年度に国庫補助事業として実施した長岡京跡右京第915次調査・右京第932次調査の概要報告である。調査対象地は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、宮域、右京域、左京域にそれぞれ分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
3. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
4. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
5. 長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数＋番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。
6. 本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』（1997年版）を参考にした。
7. 本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとづいたものである。
8. 本書の執筆は、第1章長岡京跡右京第915次調査概要を木村泰彦が、第2章長岡京跡右京第932次調査概要を山本輝雄が行った。また全体の編集は木村が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第915次	7ANKNT-9	長岡京市開田四丁目608-4	2007年10月1日 ＼ 2007年10月30日	210m ²	開田遺跡
長岡京跡右京 第932次	7ANKNZ-13	長岡京市天神一丁目37-3	2008年1月15日 ＼ 2008年2月7日	56m ²	開田城ノ内遺跡



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

第1章 長岡京跡右京第915次（7ANKNT-9地区）調査概要

1	はじめに	1
2	調査経過	2
3	検出遺構	4
4	出土遺物	9
5	まとめ	10

第2章 長岡京跡右京第932次（7ANKNZ-13地区）調査概要

1	はじめに	13
2	調査概要	13

図 版 目 次

- 巻頭図版 (1) 調査地全景 (北から)
(2) 調査地全景 (南から)

長岡京跡右京第915次調査

- 図版 1 調査地全景 (北から)
図版 2 (1) 調査地全景 (南から)
(2) 南トレンチ全景 (東から)
図版 3 (1) 南トレンチ拡張後全景 (北から)
(2) S B01-P 12検出状況 (南から)
(3) S B01-P 5検出状況 (北から)
(4) S B01-P 3遺物出土状況 (北から)
(5) S B01-P 4遺物出土状況 (北から)
図版 4 (1) 北トレンチ足跡検出状況 (南から)
(2) 北トレンチ全景 (西から)
図版 5 出土遺物

長岡京跡右京第932次調査

- 図版 6 (1) 調査地全景 (西から)
(2) 西三坊坊間東小路全景 (北から)

挿 図 目 次

第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
長岡京跡右京第915次調査	
第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 南トレンチ調査風景 (南東から)	2
第4図 掘立柱建物S B01調査風景 (北から)	2
第5図 調査トレンチ配置図 (1/250)	3
第6図 北トレンチ平面図・断面図 (1/100)	4
第7図 南トレンチ断面図 (1/100)	5
第8図 南トレンチ平面図 (1/100)	6
第9図 掘立柱建物S B01およびP3・P4実測図 (1/100・1/40)	8
第10図 出土遺物実測図 (1/4)	9
第11図 調査地周辺遺構図 (1/600)	11
長岡京跡右京第932次調査	
第12図 発掘調査地位置図 (1/5000)	13

付 表 目 次

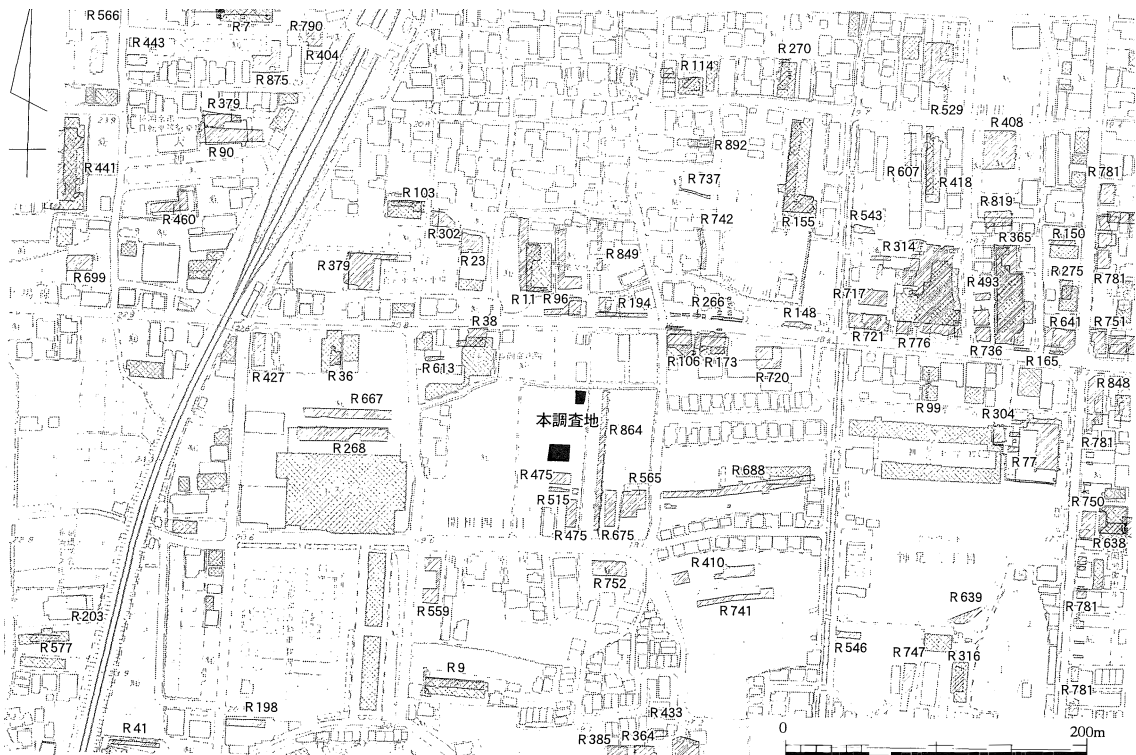
付表-1 本書報告調査地一覧表	ii
付表-2 報告書抄録	14

第1章 長岡京跡右第915次調査(7ANKNT-9地区)調査概要

—長岡京跡右京六条二坊十一町、開田遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2007年10月1日から2007年10月30日まで、京都府長岡京市開田四丁目608-4において実施した長岡京跡右京第915次調査に関するものである。
- 2 本調査は、長岡京の西市に関係する考古学的な資料を得ることを目的とし、調査対象地の水田内の北西隅に北トレンチ、南西隅に南トレンチを設定した。北トレンチは南北8m、東西6mで、面積は48㎡、南トレンチは当初南北11m、東西11mの方形トレンチとしたが、掘立柱建物の検出に伴って東側に約3mほど拡張を行い、最終的に東西にやや長い矩形トレンチとなり、面積は約162㎡となった。南・北両トレンチの総調査面積は210㎡である。
- 3 発掘調査は、平成19年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査係主査の木村泰彦が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者の方には水道水の提供をはじめとして多くの御協力を賜った。また近隣地域の方々にも種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は木村が行った。



第2図 発掘調査地位位置図 (1/5000)

2 調査経過

今回の調査は長岡京の西市に関する遺構・遺物の検出を目的として実施したものである。当調査地は長岡京の条坊復原による右京六条二坊十一町に位置しており、古くから中山修一氏の研究によって長岡京西市の候補地に比定される一帯にあっている。これまでに当調査地の周辺では多くの調査が行われ、長岡京に関連する数々の成果が得られている。当調査地のすぐ南側で行われた右京第475・515調査^(注1)やすぐ東隣で行われた右京第864次調査⁽²⁾および南東部の右京第675次調査⁽³⁾では六条条間南小路とその周辺の施設が検出されており、特に第864次調査では東西方向の掘立柱建物が3棟検出され、部分的ながらはじめて十一町域内の施設の状況が判明した。さらに南東部の右京第565次調査⁽⁴⁾では、六条条間南小路と西二坊坊間小路の交差点が検出され、右京では珍しい橋状遺構が確認されたほか、条坊側溝内からは多数の土器、「古文孝経」と書かれた木簡や「長」の墨書土器、工房を思わせる未製品などが出土している（第11図）。またこの交差点の東50mで行われた右京第688次調査⁽⁵⁾では六条条間南小路が検出され、その北側溝からは多量の木簡が出土している。特に日本最古の蘇民将来札や「市」と書かれた墨書土器は非常に大きな成果といえよう。さらに当調査地の南東100m、右京六条二坊五町のほぼ中央付近で行われた右京第410次調査⁽⁶⁾では、「金銀帳」と書かれた題箋が出土しており、この付近に金銀の出納に関わる施設が存在した可能性が考えられた。

今回の調査地は、阪急長岡天神駅の南東約300m、上述した右京第475・515調査が行われた地点のすぐ北側の水田にあたる。地形分類上では調査地の北半部は八条ヶ池から東に伸びる開析谷に、南半部は後背湿地にあたる。周辺は交通や買い物などの利便性から近年急激に宅地化が進行する一帯で、これまで開発等によって周辺の水田は急激に減少している。今回このような周辺の状況と長岡京西市候補地としての当地の重要性に鑑み、平成19年度国庫補助事業として調査を行うこととなった。

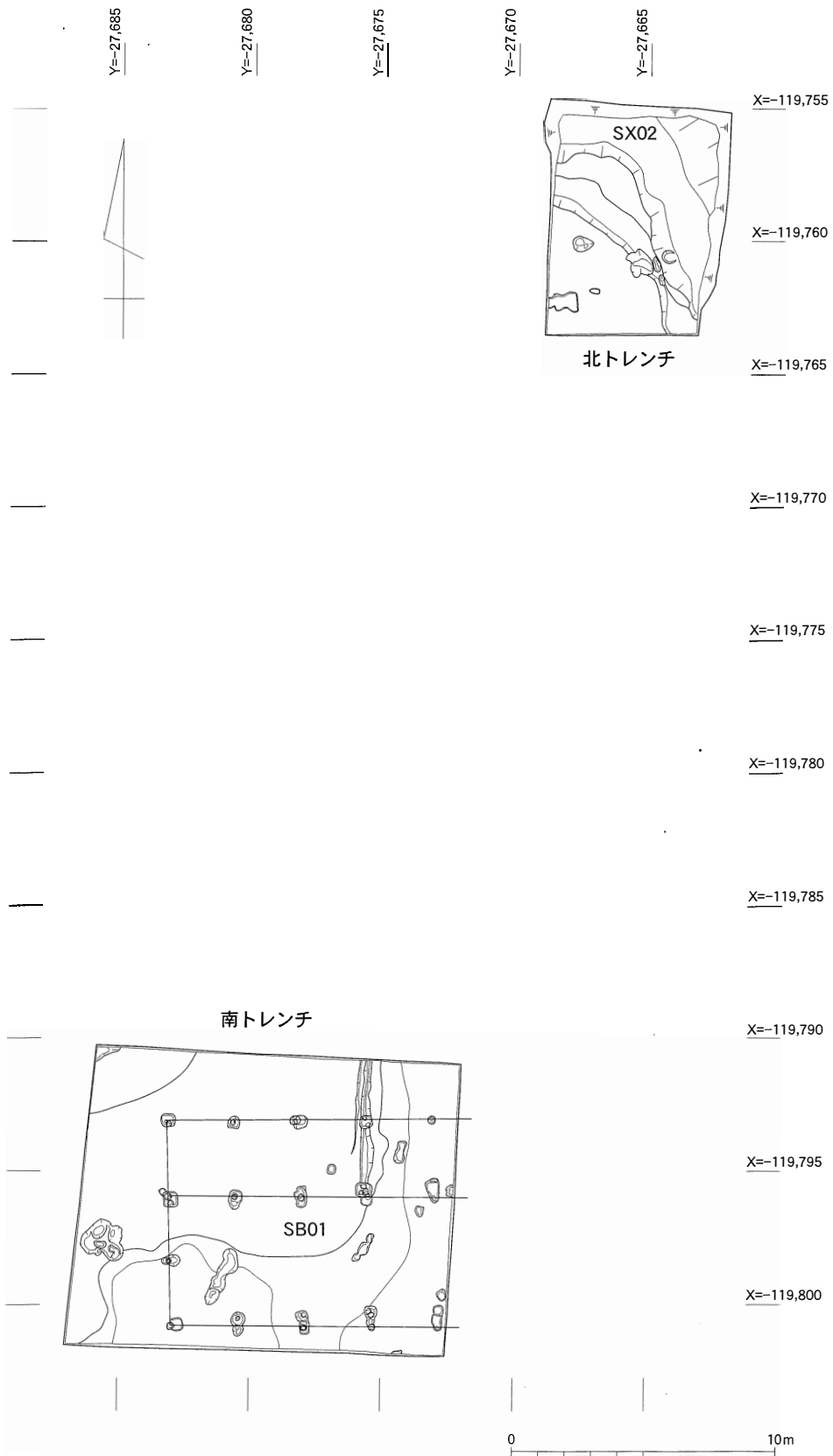
調査は対象地の北西隅と南西隅に2つのトレンチを設定、重機によって耕作土・床土・包含層の一部を除去した後、以下は人力によって掘り下げを行った。また南西隅に設けた南トレンチでは、掘立柱建物の検出に伴い、小型重機によって随時拡張を行った。



第3図 南トレンチ調査風景（南東から）



第4図 掘立柱建物S B01調査風景（北から）

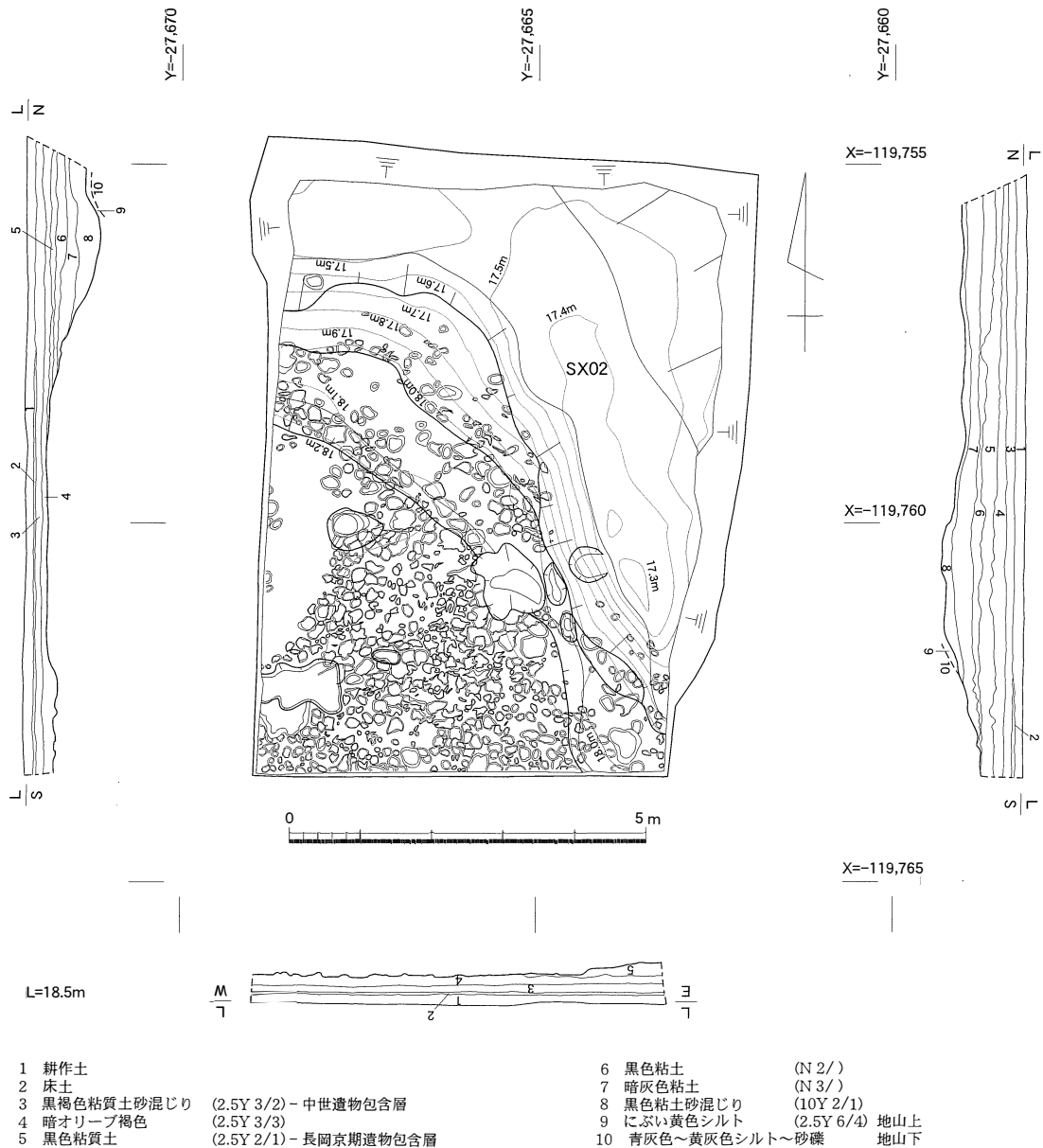


第5図 調査トレンチ配置図 (1/250)

3 検出遺構

今回の調査地は先にも述べた如く、現状で水田としての利用がなされており、水田上面での標高は約18.6mである。調査区は南北に長い矩形を呈した調査地の北東隅に北トレンチ、南西隅に南トレンチを設けることとした。北トレンチは南北8m、東西6mの矩形トレンチとして設定、南トレンチは当初は南北11m、東西11mの方形トレンチに設定したが、掘立柱建物SB01の検出に伴い東側に拡張を行い、最終的に東西14.0～14.5mの矩形トレンチとして調査を行った。

北トレンチ（第6図） 基本層序は水田耕作土（第1層）、床土（第2層）の下に瓦器片などの中世遺物を含む黒褐色粘質土砂混じり（第3層）が薄く堆積しており、さらにその下に暗オリーブ褐色（第4層）が厚さ約0.1～0.15mでほぼ水平に堆積している。これらを除くと、に



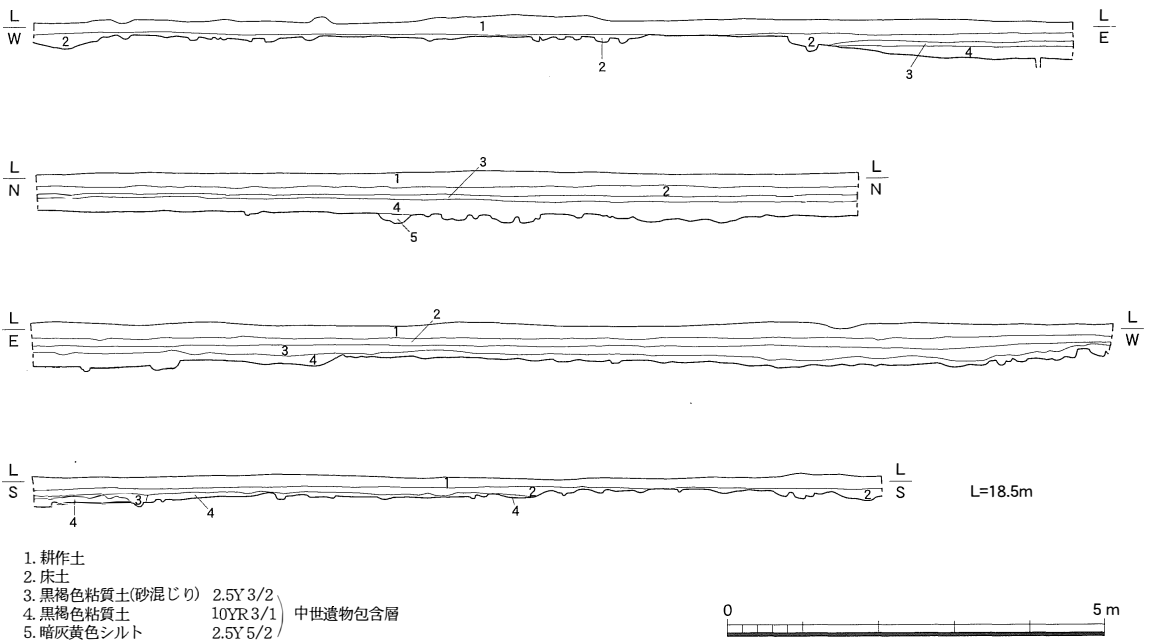
第6図 北トレンチ平面図・断面図 (1/100)

ぶい黄色シルトのベース面があらわれ、トレンチの南西部では無数の足跡状の落ち込みが全面に認められる。この面での標高は18.2mである。

これらの落ち込みは直径約0.1~0.2m、深さ約0.1m前後のもので、部分的に偶蹄目の足跡も確認できる。おそらく水田耕作に使役された牛の足跡と見られるものである。また足跡状落ち込み以外に第3・4層を含むやや大きな楕円形や不整形の落ち込みも確認されたが、遺物も小片・少量であり、人為的な遺構とは認められないものであった。

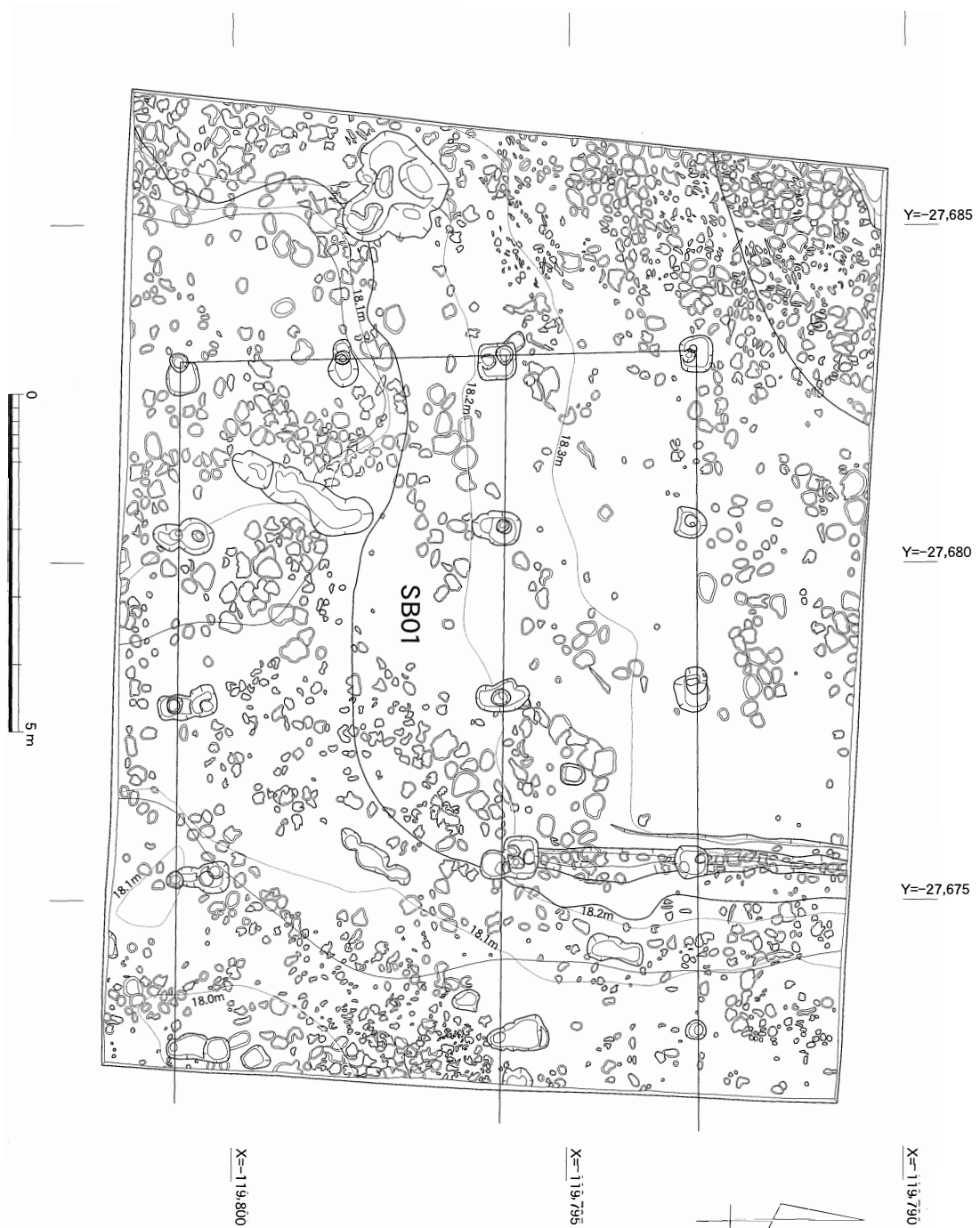
北トレンチ北東部では、この足跡状の落ち込み検出面で長岡京期の遺物を含んだ黒色粘質土（第5層）が堆積しており、これらを除去すると流路状遺構SX02が検出された。SX02は深さ約0.7m、幅は調査地北東隅付近から徐々に高くなっている状況が看取されることから約4~5mほどと推定される。調査地内では東西方向から大きく南に湾曲して南東方向に流れている。底部付近の標高は、北西部で17.5m、南東部では17.3mである。流路の肩部は、調査地北部では比較的緩やかであるが、南に行くに従い傾斜はややきつくなっている。流路内の埋土は黒色粘質土（第5層）、以下は黒色粘土（第6層）、暗灰色粘土（第7層）、黒色粘土砂混じり（第8層）の順で堆積しているが、これらの堆積層内からはまったく遺物が出土していない。部分的な検出のため全体の状況は不明であるが、地形分類において確認されていた八条ヶ池から東に伸びる開析谷の一部ではないかと見られるものである。堆積状況から見ると最上層（第5層）に長岡京期の遺物が含まれており、開析谷が埋没した後に右京六条二坊十一町の宅地内で、湿地状に残されていたものと見られる。長岡京期の遺物はSX02の南肩付近に比較的多く堆積していた。

南トレンチ（第7・8図） 水田耕作土（第1層）、床土（第2層）を除去すると調査トレンチの西半部ではすぐににぶい黄色シルトのベース面となり、北トレンチと同様にほぼ全面に足跡状の落ち込みが検出される。黄色シルトのベース面はトレンチの北西部付近では標高約18.4mで



第7図 南トレンチ断面図 (1/100)

ほぼ水平であるが、南に向かって緩やかに傾斜している。さらにトレンチ東半部付近には南北方向の溝を境とする段差があり、それより東側は0.3~0.4mほど深くなっている。トレンチ北東隅での標高は18.1m、南東隅での標高は18.0mである。この南側と東側の深くなった部分には北トレンチと同じく中世遺物を含んだ黒褐色粘質土砂混じり（第3層）と南トレンチのみに見られる黒褐色粘質土（第4層）が薄く堆積している。これらの層には遺物は非常に小片・少量であるが長岡京期と古墳時代の遺物も含まれている。これらの層を除去した段階でもほぼ全域で足跡状の落ち込みが確認されている。落ち込みは直径約0.1~0.2m、深さ約0.1m前後のもので、牛と見



第8図 南トレンチ平面図 (1/100)

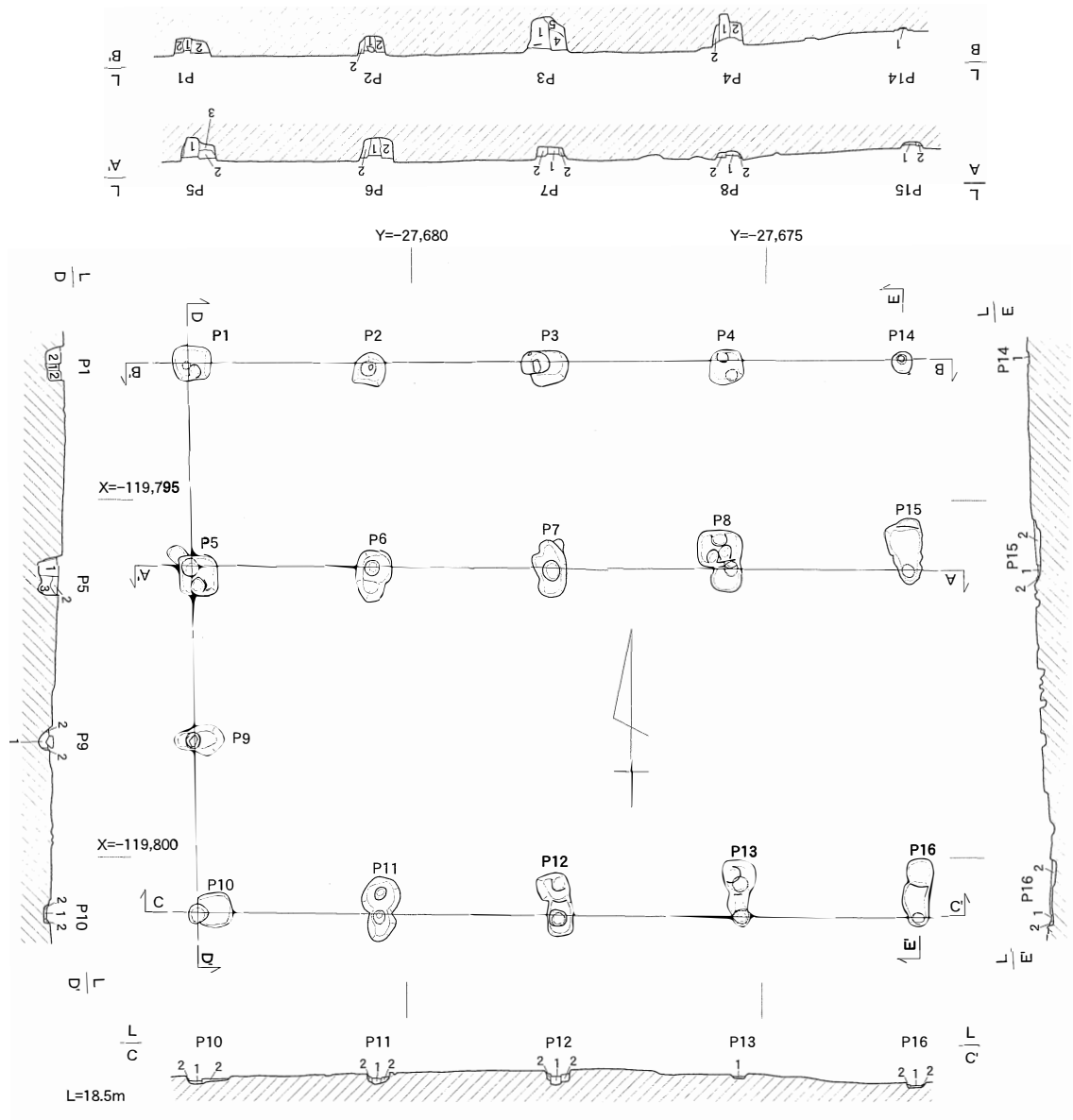
られるものも散見される。ベース面でも礫層が部分的に現れているやや固くなった箇所などでは当然のことであるがこれらの落ち込みは少なくなっている。

掘立柱建物S B01(第8・9図) 調査地の中央から東半にかけて検出された東西棟の掘立柱建物で、身舎は南北2間、東西5間以上、北に1間の廂を有する。南側は調査地外に当たるため南に廂が存在するかは不明である。柱間は東西が2.5m、南北は身舎部分で2.4m、廂は2.7~2.8mとなり、桁行がやや広くなる。柱掘形は基本的に一辺約0.5mの隅円方形を呈するものであるが、身舎部分では西側妻部を除きすべて南側に方形~長方形に広げられている。検出当初は南側に柱を抜き取った痕跡と考えたが、その箇所では柱穴が検出されたことから抜き取り跡でないことが判明した。次いで建物の建て替えの可能性も考えたが、いずれも明確な切り合いは認められなかった。その後身舎の南側のピットでは掘り下げによって北側の掘形内にも柱痕が存在することが確認された。これら2つの柱の間隔は、東に行くにつれて広がっており、P-11では約0.3m、P-13では約0.5mとなっている。さらに身舎西側のP-9・10では、柱痕は柱掘形の西外側にはみ出す形で検出されている。これらの状況は、当初計画されていた建物配置が途中変更となったことが原因と考えられ、その変更は身舎北西部のP-6を軸として建物全体を南に約2度近く回転させたものと推定される。変更前よりも変更後の建物柱筋は正方位に近い方向を示すことから、建て替えられた原因はここに求められるものと推定される。ただし北側の廂部分は建て替えがなされておらず、その結果西側よりも東側で柱間が広がる結果となっている。このことは廂と考えている部分が建物とは独立し、柵列として捉えることも可能であろう。ただ現状においてはいずれとも決しがたいことから、本報告では一連の建物としておく。柱掘形はベース面が低くなっている南側と東側では非常に浅くなっており、特に東側の柱では深さは0.05~0.1mほどであった。残りの良好な北西部の柱掘形では、深さ約0.35~0.5mで、残された柱痕は、直径約0.15~0.2mである。掘形内の埋土は基本的に柱痕が黒褐色粘土+灰黄色砂質土ブロック(第1層)、掘形内の埋土が黒褐色粘質土+灰黄色砂質土ブロック(第2層)と黒褐色粘土(第3層)で、部分的に黒褐色粘質土砂混じり+褐灰色砂質土(第4層)、褐灰色粘土砂混じり(第5層)が確認されるが、これらは柱掘形のベース層の違いによるものである。柱掘形内から遺物はほとんど出土していないが、廂部分のP-3、P-4からは遺物が出土している(第9図)。P-3は柱が西方向に抜き取られており、東西0.4m、南北0.3m、深さ0.5mの柱抜き取り痕が明瞭に残されている。その柱抜き取り痕上面から大型の須恵器皿A(第10図-8)が出土している。P-4では柱掘形底部付近から須恵器甕の口縁部片(第10図-11)が口縁部を横にした状況で検出されている。いずれも破片であり、祭祀を行ったような明確な状況は認められなかった。

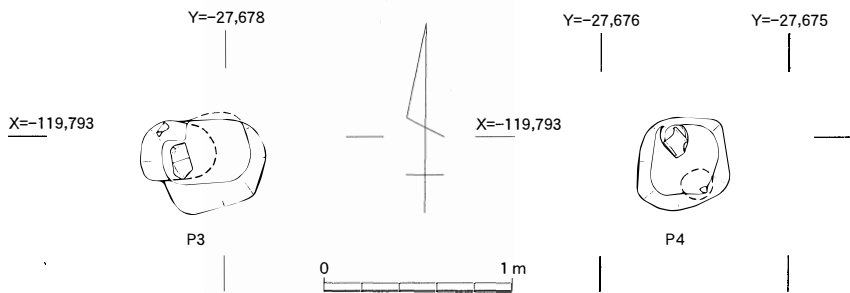
また調査地西辺部分では南北1.4m、東西1.7m、深さ0.5mの不整形な落ち込みが検出されている。底部はかなり凹凸があり。埋土は黒褐色粘質土(第4層)であるが、部分的に砂の堆積が認められた。遺物は中世と長岡京期の小片が出土しているが性格は不明である。

この他掘立柱建物S B01周辺では、北東から南西方向の大小の溝状の落ち込みが認められる。埋土は暗灰黄色シルトで、中世遺物をわずかに含むが性格は不明である。

8 検出遺構



- 1 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) + 灰黄色砂質土ブロック含み (2.5Y7/2、地山)
- 2 黒褐色粘質土砂混じり (2.5Y2/1) + 灰黄色砂質土ブロック含み (2.5Y7/2、地山)
- 3 黒褐色粘土 (10YR2/1)
- 4 黒褐色粘質土砂混じり + 褐色砂質土 (2.5Y2/1 + 10YR4/1)
- 5 褐色粘土砂混じり (10YR5/1)

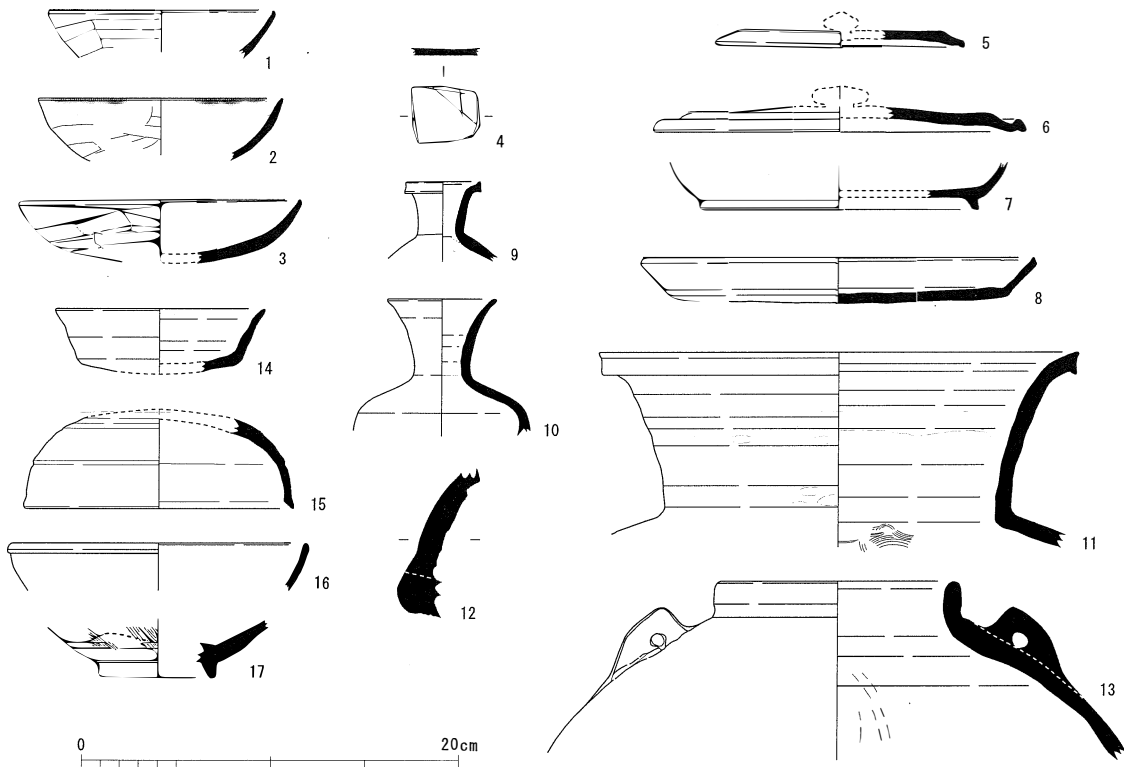


第9図 掘立柱建物SB01およびP3・P4実測図 (1/100・1/40)

4 出土遺物

今回の調査で出土した土器は非常に少量で、そのうち図示できるものはさらに限られる（第10図）。大半は包含層出土のもので占められ、そのうち最も多いのが北トレンチで、中世包含層（2・6・7・12・13・14・16・17）と長岡京期包含層（1・3・4・10）のものがある。南トレンチは包含層出土のもの（5・9・15）は少量で、これ以外には掘立柱建物S B01出土のもの（8・11）がある。図示したものは長岡京期が最も多く、次いで中世、古墳時代のものとなる。

1・2は土師器碗Aである。口縁部のみ的小片で、外面ヘラケズリ調整を行なうc手法。口径12.0~13.0cmで、2には口縁端部に灯火器使用痕が残されている。3は土師器皿Aで器高2.9cm、口径約15.0cmに復元されるが、破片のためもうひとまわり大きくなる可能性がある。4は土師器の線刻土器で、外面に三角形の3条の線刻が認められる。外面ヘラケズリ調整を行なうc手法の杯または皿の底部片である。5・6は須恵器杯蓋で、どちらもつまみを欠失する口縁部のみ破片である。5は平坦な天井部からわずかに屈曲させた口縁部を持つもので、直径3.4cmである。6は口縁部を大きく屈曲させて端部は断面三角形に作りだす。直径3.4cmで、外面には薄く自然釉が付着している。7は杯Bの底部片である。体部は丸みを帯びており、高台は細くシャープな造りで、大きく外側に張り出している。外面全体に自然釉が付着しており、胎土は紫灰色を呈する。高台径は14.8cmである。8は掘立柱建物S B01の廂P-3抜き取り痕から出土した須恵器皿Aである。平坦な底部と直線的に開く口縁部から成り、端部は上方に尖り気味に納める。焼成軟質のため表面は剥離が激しいが底部にはヘラ起こし痕が残る。口径21.0cmである。9・



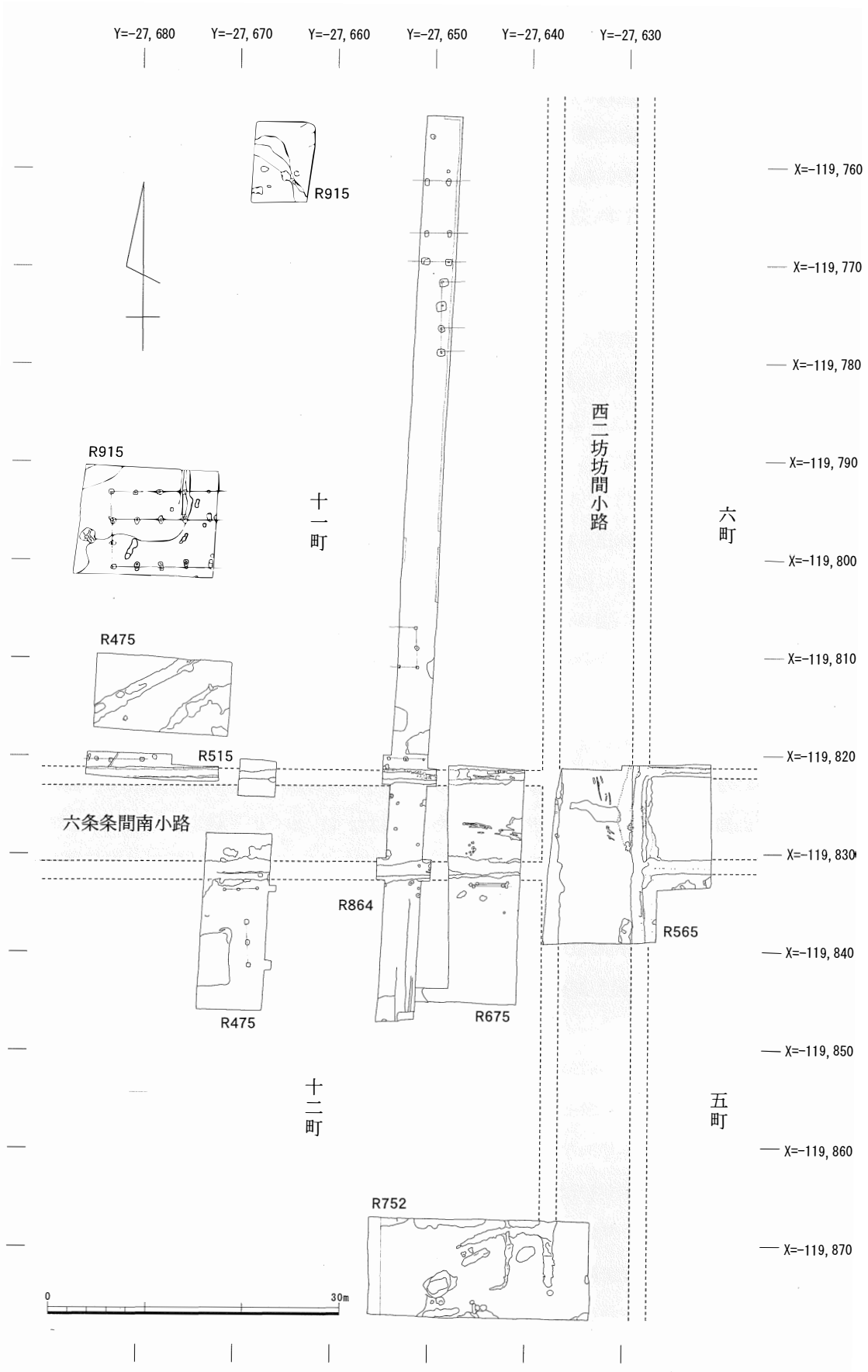
第10図 出土遺物実測図 (1/4)

10は須恵器壺Mである。9は口縁端部を上下に拡張させて直立する平坦面を造り出す。肩部内面には絞り痕が残されている。口径4.0cmである。10は外反する口縁部を持ち、端部は丸く納めている。外面全体に自然釉の剥離痕が残る。口径5.6cm。11は掘立柱建物S B01の廂P-4から出土した須恵器甕口縁部である。大きく立ち上がって外反する口縁部を持ち、端部は上下に拡張させて平坦面を作っている。口縁部外面には黄土ハケ塗りの痕跡が明瞭に残り、口縁部内面および肩部には自然釉が付着する。体部内面には細かい同心円の当て具痕が残されている。これらの特徴から愛知県猿投窯産のものと見られる。12は大形の甕の口縁部片である。口縁部内外面口クロナデで、外面に凹線が巡り、肩部内面には同心円の当て具痕が残る。破片のため口径復元は困難である。13は短頸壺で、肩部には張り付けによる耳を持っている。耳は厚さ約1cmの粘土板を貼り付けた後台形に加工し、直径約0.8cmの円孔を穿っている。破片のため、四耳壺か三耳壺かは不明である。短く直立する口縁は厚く、端部は丸い。肩部はなだらかで、外面にはタタキ痕、内面には当て具痕がわずかに残されている。14は須恵器杯A。口縁部は外反し、端部は尖り気味に仕上げる。底部にはヘラ起こし痕が残る。口径11.2cmである。15は古墳時代の須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と内彎気味の口縁部からなり、口縁端部は内傾する面を作る。外面には浅い沈線とわずかに突出した稜線が巡る。口径は14.3cmである。16は白磁の椀の口縁部片で、外面をわずかに肥厚させた口縁端部を持つ。内外面とも貫入が見られ、口径は16.0cmに復元される。17は同安窯の青磁椀の底部片で、ケズリ出しによる外面に張り出す断面台形の高台を持つ。内外面には緑灰色の釉がかけられ、内面には刺突、外面には縦方向のハケメを施す。高台径は6.1cmである。

5 まとめ

今回の調査では、北トレンチでは流路状遺構S X02が、南トレンチでは長岡京期の掘立柱建物S B01が検出された。当調査地は長岡京右京六条二坊十一町の南東部にあたり、これまで周辺地で行われた調査と合わせ、部分的ではあるが宅地内の状況が明らかとなってきた。

今回検出された掘立柱建物S B01は、これまで検出された十一町域内の建物の中では最も広く確認されたものである。建物自体はまだ東に広がることから、身舎は南北2間、東西は5間ないし7間と見られる。検出遺構でも述べたように、この建物はある程度建築が進行した後、正方位に合わせるための変更が行われている珍しい例である。建物は北側に廂を有するが規模的には柱掘形、柱直径とも小さく、柱間も不揃いな点などから、中心的な建物とは考えにくいものである。当調査地の東側で行われた右京第864次調査地の南側で検出された建物も規模が小さく、平面も平行四辺形に近いものであった。一方、右京第864次調査の北側で確認された2棟の建物は、いずれも廂を持ち、うち1棟は柱掘形も大形である。北側と南側建物群の間には遺構が存在しないが、これは今回北トレンチで検出された流路状遺構S X02の延長部分が広がっていたため、同様に湿地状を呈していた。このことはこの湿地を境として北と南で性格の異なる施設が存在した可能性も考えられよう。ただし北側建物群はすぐ東に西二坊坊間小路が迫り、西側の流路状遺



第11図 調査地周辺遺構図 (1/600)

構SX02に挟まれた空間はかなり狭いものである。当調査地の南で行われた右京第475次調査でも、部分的に湿地状の堆積が確認されており、十一町内の宅地利用はかなり制限されたものであったと見られる。宅地の周囲は、南側に柵列が巡らされていたことが右京第515・864次調査で明らかとなっているが、東側に関しては不明である。宅地内での遺物出土量は、建物遺構が大半であることもあってあまり多いものではない。同じく宅地の状況を反映すると見られる六条条間南小路の北側溝からも出土遺物は豊富とは言い難く、宅地の性格を特定できるものは検出されていない。当調査地の南東で行われた右京第565次調査では、六条条間南小路と西二坊坊間小路の交差点が検出されている。ここでは南北の西二坊坊間小路が優先された状況が明らかとなっているが、この東西側溝の出土遺物は、東側溝のものが木簡や墨書土器、工房を思わせる未製品などはるかに豊富であった。もちろん調査されている面積の差も勘案しなければならないであろうが、東西の側溝出土遺物には違いが見られる。また冒頭でも紹介したように、この交差点の東50mで行われた右京第688次調査では、多量の木簡や「市」と書かれた墨書土器が、南東100mの右京六条二坊五町のほぼ中央付近で行われた右京第410次調査では、「金銀帳」と書かれた題箋が出土しているなど、出土遺物は非常に多くかつ多彩である。このように見てみると、西二坊坊間小路を挟んで西側の十一・十二町域と東側五・六町域とではかなり差が存在している。もちろん東側では宅地内で建物などの遺構が検出されていないため単純な比較はできないが、これまでの調査で指摘されるように五・六町域が「西市」あるいはその周辺施設の可能性が高いものだとすれば、今回調査の対象となった十一町域はやや性格の異なる宅地利用がなされていた可能性が高いと見られる。もちろんこれによって当地の重要性が低くなるものではなく、むしろこのような対比が明らかになることによって、長岡京内での宅地利用の実態がより明確となってくる。長岡京内には貴族の邸宅や役所・工房だけが存在したのではなく、多くの下級官人や庶民も居住していた。特に「市」のような特殊な施設に隣接していたとすれば、下級官人や庶民の居住域の実態が明らかになることは、京内でも南部に位置した役所である「市」の実態もより鮮明になるものと思われる。調査地周辺は長岡京の遺構が良好に残されている一帯でもあり、現状での保存も含めて今後の調査、研究の進展が期待される。

- 注1) 木村泰彦「長岡京跡右京第475次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊 1995年
 2) 中島皆夫「長岡京跡右京第515次調査概要」『長岡京市報告書』第35冊 1996年
 中島皆夫「長岡京跡右京第515次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊 1997年
 3) 小畑佳子「長岡京跡右京第675次調査概要」『長岡京市報告書』第42冊 2001年
 4) 木村泰彦「右京第864次調査概報」『長岡京市センター年報』平成17年度 2007年
 5) 木村泰彦「右京第565次調査概報」『長岡京市センター年報』平成9年度 1999年
 6) 中島皆夫「右京第688次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年
 7) 小田桐淳「長岡京跡右京第410次調査概要」『長岡京市報告書』第31冊 1993年

第2章 長岡京跡右第932次（7 ANKNZ-13地区）調査概要

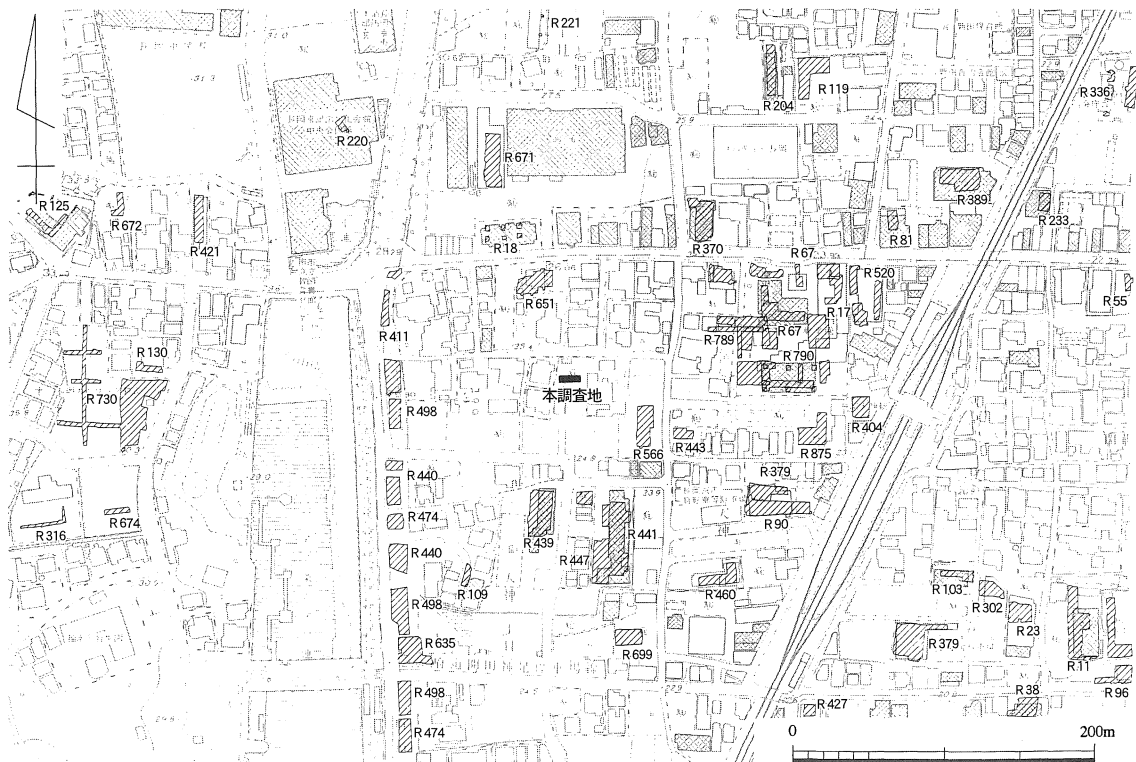
－長岡京跡右京六条三坊一・八町、開田城ノ内遺跡－

1 はじめに

- 1 本報告は、2008年1月15日から2月7日まで、長岡京市天神一丁目37-3において実施した長岡京跡右京第932次調査に係るものである。
- 2 本調査は、長岡京跡右京六条三坊一・八町（西三坊坊間東小路）および開田城ノ内遺跡に係る考古学的な資料を得るために実施したもので、調査面積は約60㎡であった。
- 3 発掘調査は、平成19年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター調査係長の山本輝雄が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺の方々に種々のご理解とご協力を賜った。
- 5 本文の執筆、編集は山本が行った。

2 調査概要

今回の調査は、これまで調査事例^(注)の乏しい長岡京の西三坊坊間東小路を検出することに主眼をおいて行ったものである。調査では、東西約15m、南北約4mの調査区を設定し、1月15日か



第12図 発掘調査地位置図（1/5000）

ら重機で盛土などを掘削し、その後人力で遺構検出を行った。その結果、当初に予想したとおり、西三坊坊間東小路の東西両側溝をはじめ、近世の土坑・溝、中世の土坑・溝、弥生時代の土坑など開田城ノ内遺跡に関する遺構、遺物を確認することができ、小面積の調査とはいえ大きな成果を得ることができた。特に西三坊坊間東小路については、比較的残存状態が良好であって、長岡京の条坊を復元する上に貴重な情報が得られた意義は大きいといえよう。それらの詳細については、遺物整理など今後の作業をまって次年度に改めて報告することにしたい。

(注) 花村潔「第95274次立会調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年

(財)京都市埋蔵文化財研究所『長岡京跡発掘調査現地説明会資料－長岡京右京二条三坊一町・八町(右京第903次調査)－』 2007年

付表-2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第51冊
編著者名	木村泰彦、山本輝雄
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かいでん 開田遺跡	ながおかきょうしかいでん 長岡京市開田 四丁目608-4	26209	107 80	34° 55' 11"	135° 41' 49"	20071001) 20071030	210m ²	遺跡範囲 確認調査
ながおかきょうあと 長岡京跡 かいでんしろ 開田城ノ内 いせき 遺跡	ながおかきょうしてんじん 長岡京市天神 一丁目37-3	26209	107 73	34° 55' 20"	135° 41' 35"	20080115) 20080207	56m ²	遺跡範囲 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 開田遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸時代	掘立柱建物	土師器、須恵器、軒丸瓦	長岡京の建物
長岡京跡 開田城ノ内 遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸時代	条坊路、土坑 土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、軒平瓦 弥生土器、土師器、瓦器、 陶器	長岡京の西三坊坊間東 小路の東西両側溝を検 出

※緯度、経度の計測は、国土座標の旧座標系を用いて行った。

圖 版



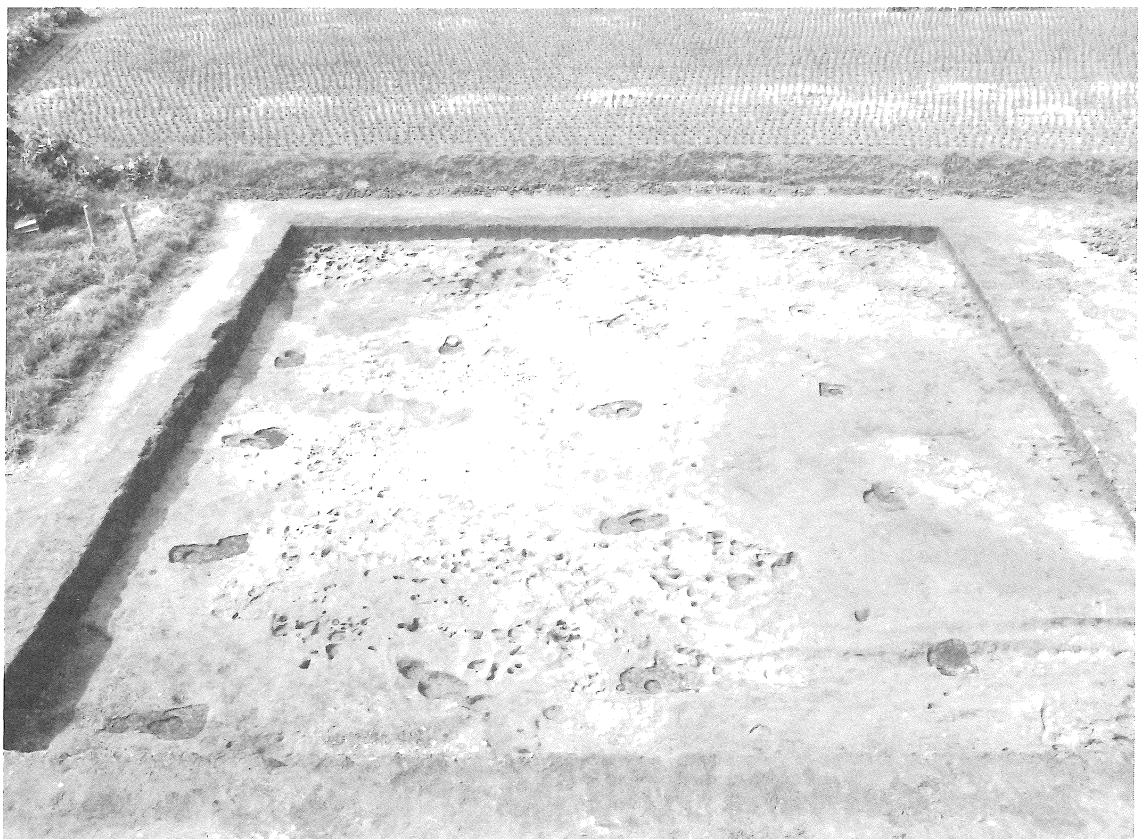
調査地全景（北から）

長岡京跡右京第915次調査

図版
二



(1) 調査地全景 (南から)



(2) 南トレンチ全景 (東から)



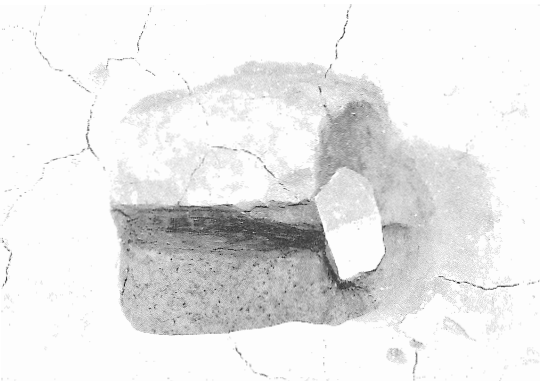
(1) 南トレンチ拡張後全景（北から）



(2) S B01-P12検出状況（南から）



(3) S B01-P 5 検出状況（北から）



(4) S B01-P 3 遺物出土状況（北から）



(5) S B01-P 4 遺物出土状況（北から）

長岡京跡右京第915次調査

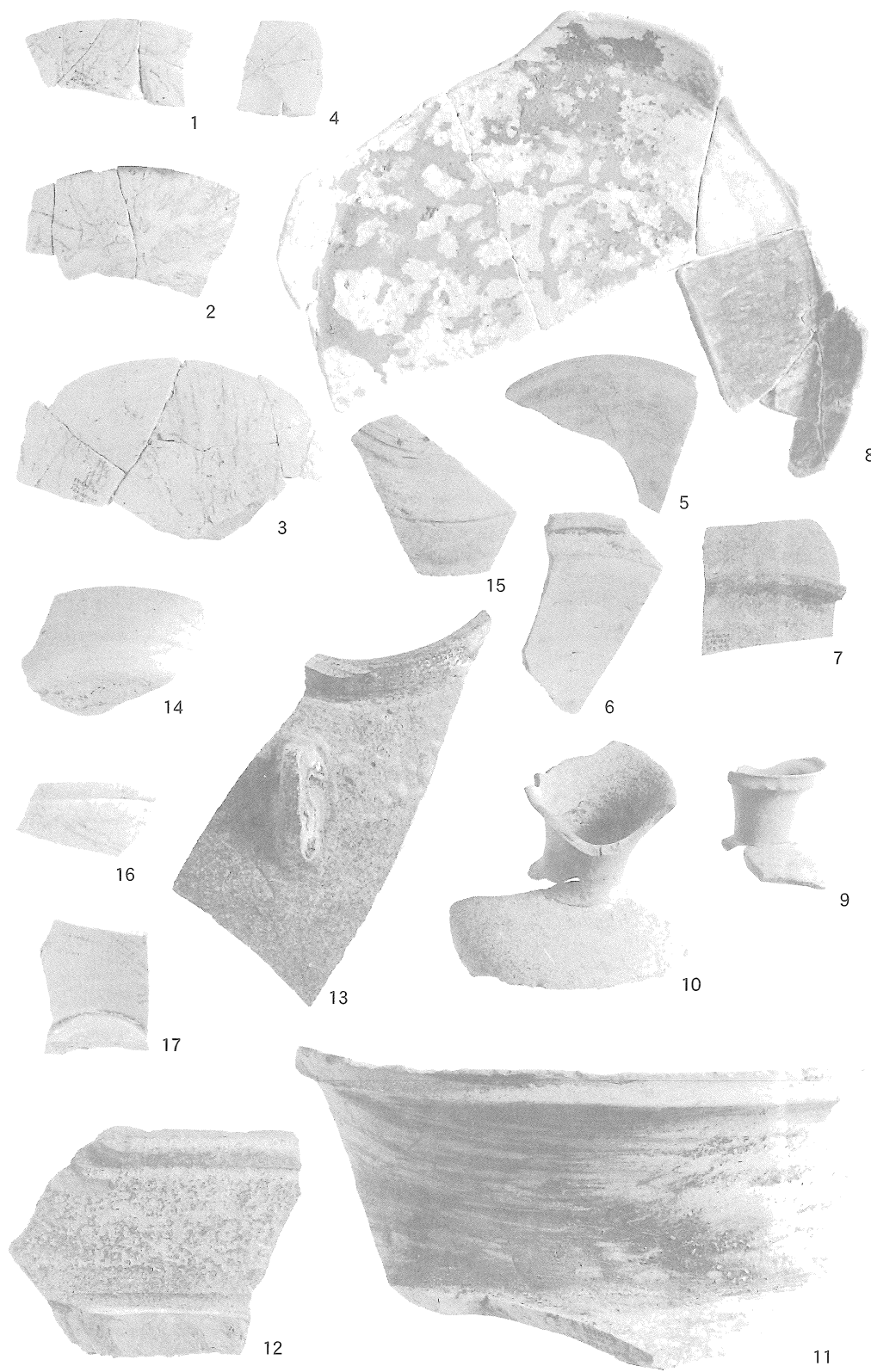
図版四



(1) 北トレンチ足跡検出状況 (南から)



(2) 北トレンチ全景 (西から)



出土遺物

長岡京跡右京第932次調査

図版六



(1) 調査地全景 (西から)



(2) 西三坊坊間東小路全景 (北から)

長岡京市文化財調査報告書 第51冊

平成20（2008）年3月28日 印刷

平成20（2008）年3月31日 発行

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1

電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400

印 刷 株式会社 アド・コム

〒600-8408 京都市下京区東洞院通五条上る深草町586番地1

電話 075-344-1118 FAX 075-344-1112